

河辺いきものの森の植物

西村 治

1. 河辺いきものの森の成り立ち

「河辺いきものの森」は、琵琶湖に注ぐ愛知川沿いに発達した河辺林の一部である。広さは約 15 ㌔あり、かつては愛知川の氾濫原であったため平坦な地形であることが特徴となっている。愛知川中流域の左岸、東近江市建部北町にあるこの森は細分された個人所有の地所であったため、開発による森林破壊から免れてきた。

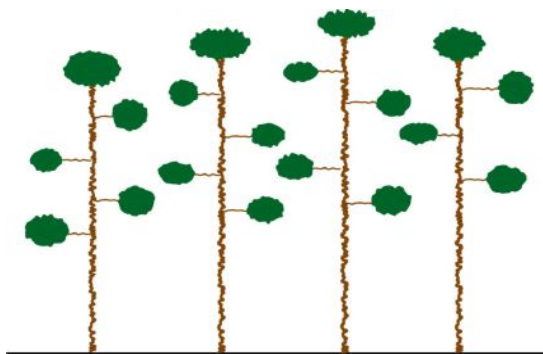
水防の為に守り育てられてきたこの林は、同時に地域の人々に燃料や肥料を提供する貴重な里山でもあった。

「八日市市の植生と地質」（1976.八日市市役所）によると、当時のこの森は『樹高 20 メートルを超えるアカマツによって優占され、落葉広葉樹のアベマキやコナラが混生する。次代を担う亜高木層にはアベマキ・コナラの他に常緑樹のアラカシが見られることは、常緑広葉樹林への移行が推定される。林床はモチツツジ・シャシャンボ・コバノガマズミ・カクミノスノキなど、アカマツ・モチツツジ群集の構成種が生育するものの、チデミザサ・ギボウシ・ネムノキ・オオバコなど、平地部の人為干渉を反映した種群も含まれている』と記されている。

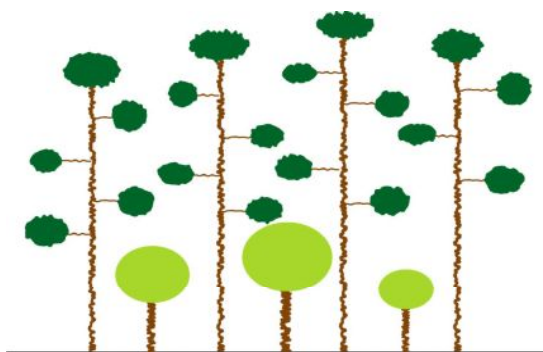
人がこの森の木を家庭用燃料として利用したのは昭和 30 年(1955)代前半まで、その後におとずれた燃料革命によって人々が森に入らなくなってから僅か 20 年ほどの間にアカマツ林から常緑広葉樹林への遷移は起こり始めていたのである。

爾来 40 年、人の干渉を受けることなく放置されたこの森は、完全にアラカシの優占する常緑広葉樹林へと遷移を遂げつつあった。河辺いきものの森の開設に先立って実施された調査をまとめた「河辺いきものの森自然環境調査業務報告書」（1997 年 3 月八日市市）によると、この森の森林群落はケヤキ林 7 %、コナラ林 53 %，アラカシ林 6 %，スギ林 3 %，竹林 25 %に大別され、アカマツ林はどこにも見あたらなかった。報告書には『古く、このコナラ・アベマキ群集の立地にはアカマツが数多く生育していたらしい。アカマツは、現在では林縁に僅かに低木が見られる程度だが、大きな切り株の残存や往時の写真がこれを裏付けている。乾性な玉石川原が安定すると共にアカマツが侵入し、その後アカマツ林に対する人為干渉がなくなると共に松枯れも加わって、徐々に現在のコナラやアベマキの優占する林へと移り変わってきたようである』と述べている。

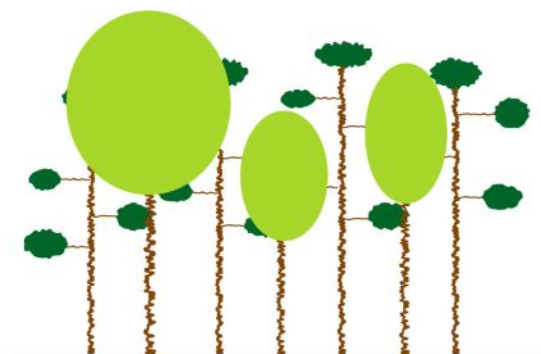
この河辺いきものの森の森林相の変化（遷移）の様子を、模式図で表すと次のようになる。



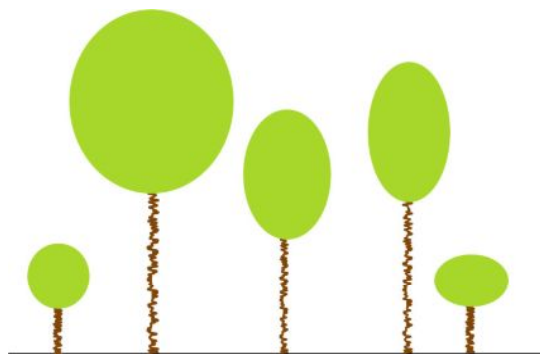
①アカマツの林
(河原にアカマツが侵入した)



②低木層に落葉樹が入る
(燃料革命以前の河辺いきものの森)



③アカマツとコナラ・アベマキの
混交林
(1975年当時の河辺いきものの森)



④ アカマツが消滅し、
コナラ、アベマキ林となる



⑤低木層にアラカシが出てくる



⑥ 1997年の河辺いきものの森

河辺いきものの森の森林相の変化（遷移）の様子

2. 河辺いきものの森の植物相

このようにして極相林への道をひた走り、人の声がしなくなって久しかったこの森を、昔の姿に戻して何とか利用できないかと考えた市当局は、この土地を借り受け、同じ志をもつ市民とパートナーシップを組み、活動を始めたのが平成 10 年、その後徐々に体制を整えつつ、調査報告書を参考にしながら整備保全活動に入っていた。

元のアカマツ林に戻すことは今となってはもはや不可能だが、光を遮っていたアラカシやネズミモチ、アオキなどの常緑広葉樹を切り払ってアベマキやコナラの落葉広葉樹の林にしたところ、明るくなった林床ではモチツツジやヤマツツジが勢いを盛り返してたくさんの花をつけるようになり、シュンラン、エビネ、ヤブラン、リュウノウギクなども多くの花をつけるようになった。しかし 40 年かかって変化してきたこの森を元の姿に近い形に復元するにはやはり 40 年以上の時間が必要だろうと思われる。

☆河辺林の特性

前出の「河辺いきものの森環境調査報告書」にも『愛知川河辺林は温帯林に分布の中心をもつ、キクザキイチゲ、ワサビ、シナノキなどが分布することで知られている。こうした特異な分布に気づき、詳しく調べたのは南（1984.1991）で、上記の種のほかにクガイソウ、オオバアサガラ、コンロンソウ、テンニンソウなどの分布をみいだした。こうした種群のほか、エビネ、クマガイソウなど、園芸用の採取で今日では絶滅の危機に瀕している野生ランの分布も確認されている。野生ランの多くはすでに取り尽くされてしまったようだが、温帯性の植物の多くは今日でも見ることができる。しかし今日「建部の森」にはこうした植物はほとんど分布しない。以前はキクザキイチゲ、イチリンソウ、



オニノヤガラ

エビラフジが分布したという証言があるが、ちょうど伐採された部分に生育していたために、失われたということである。愛知川河辺林の代表的な山地性植物とされる種のうち「建部の森」に現在でも見られるのはミヤマカンスゲ（カヤツリグサ科）、オオバギボウシ（ユリ科）、オニノヤガラ（ラン科）、シナノキ（シナノキ科）、ハリギリ（ウコギ科）、ヒロハアオダモ（モクセイ科）程度である。』と述べられているが、森の整備をはじめて 2 年目、アラカシやアオキを取り除いたところの一部にキクザキイチゲの小さな群落が認められた。更にその翌年にはイチリンソウやエビラフジの群落も見つかり、河辺林の復元が進んでいることが確認できた。

愛知川河辺林の一部である「河辺いきものの森」は東近江市にとって数少ない平地林であるとともに、標高 125 ㍎の低地にもかかわらず、キクザキイチゲ

やシナノキなど温帯性の山地植物が生育する特異性から、学問的にも注目される地帯となっている。

洪水によって押し流されてきた山地の植物は、本来なら平地の気象条件に適應できなくてすぐに消えてしまうのであるが、愛知川の豊かな伏流水が湧水となって森のあちこちに小さな流れをつくり、ごくせまい範囲ながら温帯性の微気象をつくってきた。それに適應して生き残ってきたのが現在見られる山地性の植物だといえる。現在この森で確認されている山地性の植物は、

木 本

ハリギリ・・・・・・・・・・(ウコギ科)
シナノキ・・・・・・・・・・(シナノキ科)
イタヤカエデ・・・・・・・・(カエデ科)
エンコウカエデ・・・・・・・・(カエデ科)
ヒロハアオダモ・・・・・・(モクセイ科)

草 本

キクザキイチゲ・・・・・・・・(キンポウゲ科)
イチリンソウ・・・・・・・・(キンポウゲ科)
ヤマジノホトトギス・・(ユリ科)
エビネ・・・・・・・・・・(ラン科)
エビラフジ・・・・・・・・・・(マメ科)
リュウノウギク・・・・・・・・(キク科)
オオバギボウシ・・・・・・(ユリ科)
オニノヤガラ・・・・・・・・(ラン科)
モメンズル・・・・・・・・・・(マメ科)
ツチアケビ・・・・・・・・・・(ラン科)
オカトラノオ・・・・・・・・(サクラソウ科)
ミヤマカンسゲ・・・・・・(カヤツリグサ科)
イチヤクソウ・・・・・・・・(イチヤクソウ科) などである。

☆復活した植物

過去2回の調査で認められなかった植物が、森を整備したあとに、新しく確認できたものがある。これらの多くは、土中に埋もれていた種子(埋土種子)が、環境条件の変化によって目を覚まし、発芽してきたものではないかと考えられている。それらのいくつかを紹介する。

① ハイハマボッサ(サクラソウ科)

発見当時、スタッフも今まで見たことのない植物だったので、標本を大阪自然史博物館に送って同定してもらったところ、ハ



ハイハマボッサ

イハマボスであることが判明した。1995 年版レッドデータブック近畿に、近畿地方ではもうすでに絶滅したのではないかという記述があるこの植物が、森の整備をはじめて2年目に出現した。1968 年刊行の「滋賀県植物誌」にも、1955 年頃に橋本忠太郎氏が愛知郡西小椋村上岸本（現東近江市上岸本町）で採集したという記録があるのみで、その後の調査では発見されていない。思うに、愛知川の豊富な伏流水が湧き出して小さな流れをつくっていたこの森の水辺でひっそりと生きていたこの植物が、伏流水の枯渇と共に姿を消し、その種子だけが土の中で眠っていたものと考えられる。今は、地下水を汲み上げて復元した小さな流れのほとりに群生しているが、珍しい植物であることには間違いない。

② モメンズル（マメ科）

レッドデータブック近畿 1995 によれば、大阪府では確認されているものの、京都府ではすでに絶滅、滋賀県では絶滅した可能性が高いとの記述があり、近畿の他の県ではまったく分布報告がないという希少種である。本県での情報は、1955 年頃橋本忠太郎氏が犬上郡多賀町の権現谷で採集された標本が現存するのみで、その後の調査では確認されていなかったが、2003 年に河辺いきものの森で発見され、現在も元気に生育している。



モメンズル

③ キクザキイチゲ（キンポウゲ科）

河辺林を象徴する山地性植物だといわれながら先の調査では発見されなかったものだが、森の整備をはじめて二年目にいち早く復活してきた。明るくなったアベマキの林の林床に、早春の陽光を浴びて咲く小さな群落を目にしたときは、抑えることのできない感動と共に、我々がはじめた林床整備という仕事に確かな方向性を見いだしたように感じた。



キクザキイチゲ

④ イチリンソウ（キンポウゲ科）

先のキクザキイチゲと同様に、夏緑広葉樹の葉が開く前に、可憐な花を咲かせて林床を飾り立て、「春の妖精」とも呼ばれるこの花は、ほんの三ヶ月ほどで地上から姿を消してしまう。この花が復活したのはキクザキイチゲに遅れること二年。場所は復元された水路のほとりだが、掘りあげた土は確実に元に戻してあるので、森の外から入り込んだ形跡はない。文字通りの埋土種子が発芽

したものと思われる。

⑤ タコノアシ（ベンケイソウ科）

水路復活工事を行う際、昔の水路跡に小さな株が発見され、しばらく外部に避難させてあったのを工事完成後に元に戻し、今は数株が元気に育っている。水際を好む性質があり、春から夏にかけ、数本の茎を叢生し 70 cm ほどに生長する。夏、茎頂で枝分かれして枝ごとに一本の花穂をつける。これが秋の稔りと共に真っ赤になつて、その反り返る様が蛸の足のように見えるのでこの名がある。環境省の絶滅危惧種にあげられている。



イチリンソウ

⑥ オカトラノオ（サクラソウ科）

竹藪を伐りひらき、抜根して作った通称「くさはら広場」に勢力を広げ、花時には広場一面が純白の花穂で埋め尽くされるほどである。もともと山地や原野の日当たりのよいところを好む植物なので、この「くさはら広場」の条件がこの花にとってはよかったものと思われる。いまは日当たりがよくなった林の中へも入りこむほどの勢いである。



タコノアシ

⑦ ヤマジノホトトギス（ユリ科）

名前の通り本来は山地に生える多年草。それが「くさはら広場」のメリケンカルカヤなどに混じって咲いているのが発見されたのが二年前。場所は竹藪を掘り起こしてかなり荒っぽい土壌の攪乱を行ったところなので、眠っていた埋土種子が目覚めたと思えない植物である。今年の夏には、少し離れた他の場所でも数本確認された。



オカトラノオ



ヤマジノホトトギス

⑧ ウメガサソウ（イチヤクソウ科）

05 年の六月に初めて発見されたこの森のニューフェイス。茎の高さが約 15 cm と非常に小さな植物なので、目につきにくかったのかもしれない。生えていた場所はテイカカズラのつるがはびこっている林床で、白い花が咲いていなければなかなか見つけにくい植物である。この植物も、県の絶滅危惧種に指定されている。



ウメガサソウ

⑨ リュウノウギク（キク科）

林床整備作業を始めて一番に現れたのが、この山地性の野生菊である。山頂の草原や岩場に群生するこの植物は、強風や低温などの厳しい環境条件にも耐えられるが、陽光不足には非常に弱く、切り株から伸びたひこ生えや雑草によって光が遮られるとすぐに勢いが弱ってくるので、草刈りなどの手入れが欠かせない。



リュウノウギク

結び

1998 年に始まった遊林会（河辺いきものの森の保全整備をするボランティア団体）の活動にかかわってきて多くのことを学んだが、なかでも、埋土種子の発芽に見られるような強靱さと、ひとたび環境が変化するとたちまち衰えていく脆さを併せ持つ植物の生命の不思議さは、森全体を守らなければ、個々の植物を守ることはできないのだという、環境保全の原点を教えられたような気がした。また植生の多様性が増すことによって、チョウや甲虫などの昆虫類や、それを捕食する鳥の仲間、そしてネズミの仲間やノウサギ、キツネなどの哺乳類など、様々な動物も確実にふえてきていることも確認できた。

参考資料

滋賀県植物誌 北村四郎 保育社 1968

八日市市の植生と地質 八日市市役所 1976

愛知川河辺林「建部の森」の自然 八日市市 1997

里山保全活動から自然環境と人の再生へ 武藤精蔵

（環境と公害 2002 第 31 巻第 4 号）

河辺いきものの森の成立過程 武藤精蔵・丸橋裕一

（環境保全学の理論と実践Ⅳ 森誠一編 信山社サイテック 2004

近畿地方の保護上重要な植物 （レットデータブック近畿研究会 1995）